

身近な東南アジアを体感する

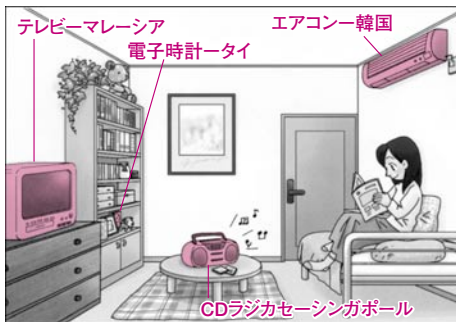
長野県長野高等学校 市川正夫

I. はじめに

『東南アジアについて何を連想するか』と生徒に発問した時、どんな答えが返ってくるだろうか。『スマトラ沖の地震とそれによる津波の被害』、『フィリピンのバナナ』、『タイの米』などの知識はあった。ところが東南アジアにはどんな国があり、どんな生活をしているのか、日本との関係など知らない生徒が多い。そこで高等学校の地理では、東南アジアがいかに日本にとって身近であるかを、教科書「高校生の地理A～くらし・世界・未来 最新版」の「地理情報局発」を活用しながら、日本の進出企業と熱帯作物という視点から学ばせたいと考えて、授業案を作成してみた。

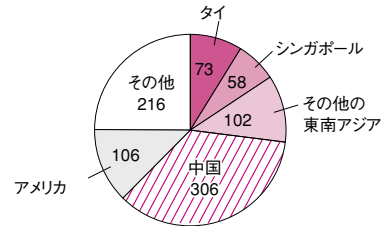
II. 東南アジアの製品があふれている日本社会

1. 自分の周囲において日本のメーカーの製品ではあるが、東南アジア製 (Made in …) の電気機械等を見つけてみる。なぜ日本企業名が書かれているのに、東南アジア製なのか疑問を抱かせる。



2. 身近な地域〔市町村・都道府県〕にあり、東南アジアに進出している企業〔製造業がよい〕について調べる(県庁内の商工部か近くのジェトロの支部で資料が入手可能)。そして東南アジアのどの国に、どんな目的(製造・販売)で進出しているかを図化する。

図1 長野県における海外進出事業所(2004年12月現在)



長野県商工部産業振興課による

・長野県における海外に進出している事業所のうち(861)、国別では中国が全体の3分の1以上で、次がアメリカ合衆国である。地域では東南アジアが243事業所で全体の28.2%となっている。

3. 教科書のp.34から、ASEANのなかでもタイに注目して調べてみる。

図2 日本企業のおもな海外進出

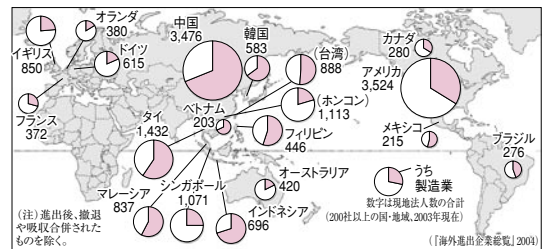
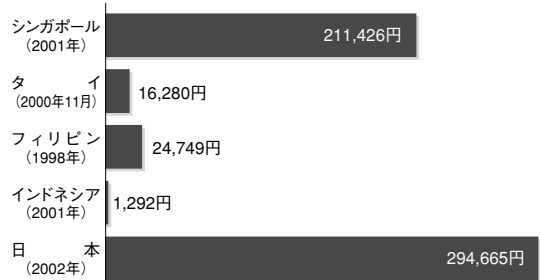


図3 東南アジアの製造業における賃金



(「世界の厚生労働」2003による)

・タイに進出している日本企業は1992年644社、2003年1432社と増加している。そのほとんどが製造業である。
・東南アジアの中でもタイに対する日本企業

の進出率が高いのは、製造業における賃金の安さである。

Ⅲ. プランテーション作物から見た東南アジア

東南アジアの農業のキーポイントは、稲作とプランテーション農業である。まずプランテーション作物に関する授業は、導入時に実物の作物か製品を入手して、その栽培・加工方法、製品等について考えさせる。なかでも手で触ってみることは、においを嗅ぐこと、食べることが可能なものは実際に食してみる事が重要である。そして、プランテーション農業の特色については紀行文から考えさせてみた。

1. 入手可能な作物または製品

作物名	作物の観点	入手先
カカオ豆	<ul style="list-style-type: none"> ・カカオの実をつぶして食べてみる。意外に淡白な味でチョコレートの香りがする。 ・産地はインドネシア 	チョコレート製造元
ココヤシの実	<ul style="list-style-type: none"> ・用途としておもにコブラに加工され、パウダーやミルクとして市販されている。 ・産地はフィリピン・インドネシア 	沖縄県の果実専門店（インターネットで注文が可能、1個約1000円）
さとうきびの茎とビート(さとうだいこん)の根	<ul style="list-style-type: none"> ・砂糖の原料として両者の相違点(きびと大根、栽培条件、加工方法)を知る。 ・さとうきびの産地はタイ 	沖縄県の果実専門店 北海道の農協

2. ココヤシの実からジュースとコブラを取る

- ①ココヤシの実を入手する
- ②ココヤシの実から果汁を取り出して飲んでみる。
 - ・実が硬いのでのこぎりかなたで上部を切り、穴をあけて飲んでみる。におい、味についての感想を言う。
- ③ココヤシの実から胚乳をとる。
 - ・胚乳をナイフでかきとり食べてみる。味についての感想を言う。
- ④胚乳を乾燥させる。
 - ・これがコブラで商品作物となる。

- ⑤コブラからココナッツミルクやココナッツクリームを作る。
 - ・カレーに入れると甘いタイカレーになる。



ココヤシの果汁を飲む ココヤシの胚乳をかきとり食べる

3. 『プランテーション』って何？

インドシナ半島の畑地における栽培形態は、プランテーションやエステートといった大規模経営である。これは植民地時代に宗主国の大きな資本により現地の労働者を雇い、熱帯農作物を生産し加工を行った経営である。カンボジアのある天然ゴム園のプランテーションを見学したが、以前は旧宗主国であったフランス人が経営し、現在は国営となっていた。ゴム園の広さは8haで労働者は畑に4,000人、工場に200人、家族を含めると4万人が生活している。ここには小学校が6つ、中学校が1つ、病院が2つある。園内にはゴム園が並び、幹には樹液を採集するために細い溝が何本もつけられる。1日1回幹に傷をつける作業がある。1本のゴムの木から、約80年間生ゴムを採集することができる。しかしカンボジアでは、このような大規模のプランテーションを経営しているところばかりでなく、自給自足的な農家と換金作物であるスイカやバナナを作る農村もある。『アジアの村を歩き続けて』アジア太平洋農耕文化の会より一部書き加えた」という具体的な話を紹介した。

Ⅲ. おわりに

実物教育の授業は、導入時に実施すると生徒の関心が高まる。しかし興味本位で終わってはいけない。東南アジアでは、日本企業の進出と熱帯作物を栽培することが、どう地域に影響を与えているか(生活、経済、環境等)についても関心を持たせる必要があるのではないだろうか。